

《10月例会報告》

牛の糞にも段々

大衆の生み出した論理思考

— index —

1. 武田恭宗：研究会紹介
2. 庄司和晃：庄司談話録3
 - ・三段階論文（アリンコ、竜）
 - ・論理的思考の今昔
 - ・経験主義的理科研究時代（1958年頃）
3. 篠原賢明：人の道一生の教材化への構想
4. 滝北利彦：クライアントに届かない言葉は心を通過しない
5. 伊東 峻：これだというものを探したい
6. 徳永忠雄：指名の技術・前編

《参加者》庄司、武田、篠原、植垣、小田、滝北、伊東、徳永

庄司語録紹介

冒頭に全国小学校国語研究所・事務局長として多忙な武田さんから10月11日に行われる研究会の紹介があった。

その折りに庄司先生が武田さんとの問わず語りの話の中（約25分）の貴重な名言集とも言える言葉がいくつかあったので紹介したい。

・「踏まえて」とか「ひとりひとり大切に…」とかいうのは（言葉の力が）弱くなってしまっ

ている。カリキュラム上こういう内容を押し出すんだとか、こういう教科書教材はダメなんだとかそういう風なものが出てくるといいなあと思うけどね…。

・校長さんたちが集まるというのがなんだかくさいんだね。…かぐや姫（の物語）なんか地域尊重教育でどこでもやっっているんだからやっても弱いと思う。（教科書をやめて）例えば昔話教育をやる、なんていうことじゃないと校長さんたちが動かないと思う。

・（若手が集まらない、組織が成り立たないという武田さんの話を受けて）つづれるときは思い切っ

てつぶして、仮説実験授業も板倉さんがいなくなつてごたごたしたらピタッとやめてね、歴史は進むから時代もそうなつてきているから根本的に考え直す時じゃないかな。

・(教育にエネルギーを持っている人が少ないという意見に対して) 案外出てきているんですよ。めつけなきゃいけない、出てきてるんですよ。…だから校長教育からやらないといけな

いね。
・校長というのは何なのか、校長論を考えてみたらどうですか。仕事減らさねばならないとか、授業に専念しろとか、出席簿なんてい

いからというくらいのね校長論を打ってもらいたいね。
ここまで編集し原稿を庄司先生と武田さんに見てもらったところ武田さんからは次のようなコメントが届きましたので紹介いたします。

武田さんのコメント(1/21)

庄司先生の「校長さんたちが集まるというのはくさいだね。」という意見には必ずしもそうではないのではと思います。そういう校長だけではないからです。「新たな時代の知を育む学校経営—アカデミックさと学びの機能が生きる学校の創造—」という志を持って学校を運営されている奈良の校長さんもいるのです。ここは、ベテランから若手まで教育熱心な先生方が多いのです。これを発見し育てるのが我々です。私は、ある学園の校長になることに決まりました。庄司先生の「校長論」の提案について、いずれ論文発表してみたいです。

学校教育の閉塞感の遠因として校長の存在をあげる人は少なくないだろう。武田さんの研究会の校長先生はともかくとして、教育を学校教育の枠を取っ払って日本人の

習俗や経験(歴史)から見つめようとする庄司先生の思いが見えてきた気がした。

私の研究遍歴・談話録(3)

庄司和晃

三段階論文の意味

看護学校の学生たちが表現する様々な三段階論文から見えてくるものは、もともと大衆にはそのような三段論法的な発想が内在しているということである。経験—比喩—概念—と進む認識ののぼりおりの仮定を無意識にも部分的にもたどっているということなのだ。三段階連関理論はそれを顕在化し意識化したものといえるだろう。

三段階論文の基本素材はアリンコである。構造がわかりやすく観察もしやすい。日高敏隆氏にも見せたアリの絵は庄司先生の認識論の原点であったことが分かった。

宗教の論理の入門として「竜の三段階論文」の資料も今回提示された。発展として大仏の三段階論文もあることは既知の通りである。

論理的思考の今昔

三段階論文を支えている認識形態は論理的思考だ。論理的思考というと哲学的、学問的に聞こえるが一般大衆の中にもそういう思考活動があるんだという再認識が「論理的思考の今昔」である。

レジュメに登場する「牛の糞にも段々」というコトワザがなんともいい。ものごとには順序がある、ということだ。牛の糞からそれを導き出す一般大衆の目線のおかしさのようなものを感じずにはいられない。

(一般大衆の発見)

- その1 正しい考え方の結晶
- その2 コトワザとしての結晶
- その3 箇条の単純化の結晶

以上の論理思考と同時進行で「知識人の発見」として以下のものが紹介された。

その1 形式論理学の原理

その2 弁証法論理学の法則

その3 戒や律の創造

その4 人間思考の有限性の発見

上記を補完するものとして

論理学の法則とコトワザ

弁証法論理学・形式論理学

重要なことは、大衆の論理も知識人の論理も現実や生活を思考の出発点としているという指摘である。両者はともにコトワザという中間段階で融合しているように見える。

学問を作る、ということは今でも意識しているといわれる庄司先生だが我々自身も日常を意識的に見つめ自分の筋道を明示していく必要があるだろう。

経験主義的理科研究時代(1958)

戦後に生き残った人々はどこに教育の拠点を見つけるかということに腐心した。そのよりどころになったのは主に以下の3つ。

- ・アメリカの教育
- ・大正自由教育(成城などの私学)
- ・ソビエト教育学(柴田義松さんら)

理科教育展開の端緒は『理科の授業改造(小学生の自然観と予想授業)』(明治図書)にはじまる。これを予想学習に観察を加えたと三浦さんが評価したという。

そこでの注目点の一つは独特な自然把握である。例えば研究対象は「イモリと子ども」ではなく「イモリと子どもの間」と間がつく。この間とは、対象をどう見るかという位置的な視点で、イモリそのものの研究でも子どもの発達心理の研究でもなかった。それを“こちら中心からあちら中心”と銘打って鏡のように広げていく。

観察が主たるものであるからハイマワリ学習と揶揄されたこともあったという。(これがやがて総合教育としての散歩科になっていく)しかし観察こそ認識の初段階であり、そこがおろそかであると見えても見えないことが起こるのである。(「人は実物が見えるか」(日高敏隆)参照。)

科学教育とは何かということを追求していく中で考えたのは科学的思考を相対化することだった。科学的思考の先頭を走っていた科教協の研究会で庄司さんが「宗教的思考、昔話的思考との違いを見つければ科学的思考は分からない」と発言した。科学ばかりを見つめている人々には分からない発想であったろう。観察、資料の蓄積そして民衆の心持ちを意識していればこそその発言であった。

当日の話の途中で登場したアリンコを描いた子どもたちの資料を見て一同は驚嘆した。机いっぱいには広げるとすごい量でそのなかには日高さんに見せたアリの絵もあったからだ。

先生の家から子どもたちのノートが40数冊も出てきたともいわれ、資料の保存能力に驚くばかりであった。

研究における資料の重要性については、子供たちに対するアプローチが重要で「すくい上げメソッド」、「おしゃべりメソッド」、「糸たぐりメソッド」と様々な方法を駆使した手法があることでもわかる。

理科の学習は対象に対する専門的な知識だけを探るものになりがちだが、庄司理科論を見ると観察や予想、そして子供たち同士の関係の中から様々な認識や思考に展開していく力を持っていくことに気がつくのである。

そのような考え方から生まれてきたのが『科学ばかり主義の克服』(明治図書1986)であった。これをみた科学的思考の泰斗三浦つとむさんは「なんでこんなこと

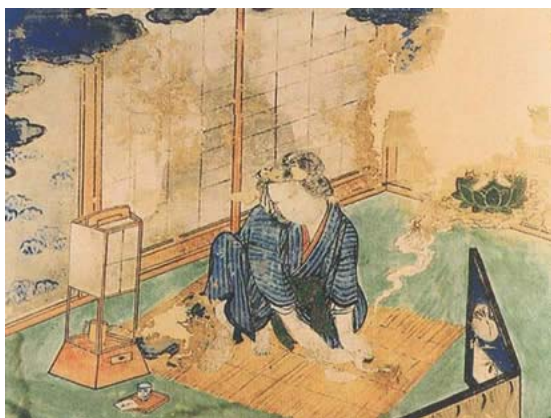
重要なことは、様々な人生における通過儀礼を知らしめることではなく、前代の人々の「人の一生」における知恵や相互扶助関係をその由来の意味とともに理解することである。

古来から人々は節目というものを意識し大切にしてきた。そのエネルギーは現代のお誕生会や様々な年中行事の比ではない。

篠原さんの取材は北信濃の比較的都市部の調査を元にして作られたものだが、やはり様々な習俗がなくなったり形骸化していることが分かる。自身及び家族の貴重な産湯や宮参りの映像も冊子に盛り込まれたが、今後どのように子供たちに伝えていくかが課題となるだろう。

今回は七歳あたりまでの習俗の紹介であったが最終的には人生の終了までその範囲を広げていくことになるという。まさに全面研でいうところの「死の教育」に至ることになる。

7歳以降は年中行事がぐっと減ってまた現代化されている。そのあたりをどう教材化していくのか注目していきたい。



柳田が10代で見た茨城県布川町徳満寺の絵馬

これだというものを探したい
伊東峻

会の最後の方で伊東君が「これだというものを探したい」という発言があった。

彼は向井さんの薫陶を受け、道岡さんと同じ職場でその影響のものにあつた。

「ちゃんとした道筋を作りたい」との弁は、庄司先生が繰り返し語る研究の道筋のことを指しているはずだ。論理学を意識し大きくつかみコツコツと実践するという手法のとば口に伊東君もいるのだと思う。

それに対して植垣さんは、児童詩研究谷国語研究などに彷徨した自分の若き教員時代の様子を語った。その中で他人の実践をなぞってもなんか空しさを感じたという吐露は貴重だ。

全面研は大きな骨組みはあるがそれを同現場で処理するかは自分次第だ。そこには誰かの実践の後追いでは出来ない深い認識と創造力が必要となる。

小田さんも大学の学生と接して若者がすべて意欲がないとか、孤立しているということはないという。後述する滝北さんに登場する若者のように一芸に秀でていたり意外な魅力を持っている若者は少なくないようなのだ。

我々はステレオタイプに若者を捉えやすいが庄司先生のいうように見つけようとする意識や彼等から現代を学び取る気持ちも必要なのではないだろうか。

クライアントに届かない言葉は 心を通過しない

滝北利彦

介護現場で学生の実習体験を統括する滝北利彦さんの2回目の報告。

滝北さんはわざわざ「ケースワークの流儀」新聞を全面研用にダイジェスト版で作って持ってきてくれた。今回は、前回紹介

上演された紙芝居『ヒーローとは何か』の続編で、ケースワーカーの悩みを介護劇という形で発表したものをビデオで紹介してくれた。

介護の現場は様々な意味で大変さが伝えられている。待遇の問題、経営の問題、クライアントの関係、様々な老人の問題…。そのような諸問題をかかえた現場からの報告のはずなのに、深刻さや大変さ以上に明るさやポジティブさを強く感じるのは何なのか。

いうまでもなく滝北さんのキャラクターによるところが大きい。そこに仲間や実習の学生が牽きつけられていく様子がよく伝わる。実習のゼミ最後に登場する歌はDVDからでもその熱気は十分に伝わってくる。鈴木君と岩田君という若者の作詞作曲の歌は「ideal reaization (理想の認識)」。

「♪介護士には何が必要なの、技術も確かに大切だけど、一番大切なものは～」と歌われる。

タイトルの中にある認識という言葉こそ滝北さんが単なる人間関係論に終わらせずにそこに血の通った認識論を加えることで達した境地が見える。

「クライアントに届かない言葉は心を通過しない」というとき、どのように相手にアプローチしたらよいかという血の通った作業が要求される。植垣さんが言っているように教育現場でもそこは同じことなのである。全面教育学が単なる学問研究ではない花には花の虫には虫の生き方があるという認識につながる言葉であった。

指名の技術・前編

徳永忠雄

庄司先生の言によれば戦後教育の一筋の流れの中に「教授法」の研究もあったとい

う。それは価値観の変容した戦後の教育界の混沌の中で求められた必然だともいえる。

さて私も2年前まで中学校の教室で授業を行い現在も学習塾を営んでいるのだが、若い先生や学生たちの子どもたちの学習へのアプローチ（教え方）は心許ないと感じてきた。

もちろん私もかつてはそうだったのだが、40年近く子どもたちの前でやっているうちにおかげさまでそれなりのものが身についたようだ。そう思ったきっかけは、若い先生たちに授業を見せたときの指名についての質問からだ。

教授法はどちらかといえば技術であるが、私が思い描くのは名だたる斉藤喜博さんのような神がかりではない。

庄司認識論をバックボーンに教授法を理論化できないかという思いが頭の中をよぎっている。具体から抽象へ、抽象から具体へ、この思考過程を踏まえて教授法を見つめたらどうなのだろうか。

幸い当日の伊東君や滝北さんにはその思うところが伝わったような気がしている。

【1月例会】

1月31日（土）

14:00～15:30

場所：成城学園大学棟3階

内容：庄司和晃研究遍歴4

そのほか持ち込みレポート

なお今年度は年報の編集は行いません。

事務局よりお願い

当日、2年ぶりになります。通信費の会費を徴収させていただきます。

一人1,000円をお願い致します。

